

2023 年度 前期

個別学力検査

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は 24 ページあります。解答冊子には解答用紙 5 枚が綴じられています。
3. 試験時間は 90 分間です。
4. すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください(氏名は記入しないでください)。
5. 問題冊子と解答冊子に印刷不鮮明や落丁などがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 試験中に気分が悪くなったときは、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
7. 問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。ただし、無断で複写、複製、転載などを行うことはできません。

個別学力検査

国

語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語の解答はすべて解答用紙に書くこと。

第一節

日常生活の中で私たちはヒンパンに挨拶をかわします。知り合いであれば、「やあ」「おはよう」、初対面の人ならややかしこまって「はじめまして」「こんにちは」など、いくつもの決まり文句や型があります。おもしろいのは話しことばの世界と同じように、文章の世界でもこうした挨拶が行われているということです。誰かと会っていきなり用件に入る人があまりいないのと同じように、文章でもまず挨拶がかわされ、おもむろに本題に入っていく。また、文章の一部が挨拶の役割を果たすだけでなく、文章そのものが、つまりその全体が挨拶として機能していることもあります。

a 事例の一つとして東京大学総長の告辞^(A)を見てみましょう。式辞(告辞)は式典の一部ですから、当然、声に出されるものではありませんが、きちんとした式次第の中で原稿を用意して読み上げられるものであり、原稿が公開されることも多いので、話しことばとも書きことばとも言えない折衷^(B)のようなところがあります。以下がその冒頭部です。少々長くなりますが、五段落ほど引用します。

本日ここに学位記を授与⁽ⁱ⁾される皆さん、おめでとうございます。東京大学教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また皆さんをこれまで励まし支えてくださったご家族や友人の方々にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本年度は、修士課程 3, 320名、博士課程 1, 223名、専門職学位課程 344名、合計で 4, 887名の方々が学位

を取得されました。そのうち留学生は1、113名です。

皆さんは、修了の日を迎え、これまでの日々を振り返り、様々な感動あるいは苦勞を思い起こしていると思います。仲間や教員とのかかわりのなかで、知の創造の場としての東京大学を実感された方も多いでしょう。4月から、大学や企業で研究を続ける人もいれば、様々な職業の新たな世界に踏み出す人もいるでしょう。東京大学での経験が、皆さんの今後の活動の土台となっていくことを期待しています。

本日の学位記の授与を、皆さんやご家族の方々と共に、ここに集って、祝うことを私たちも楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形で式を執り行うことに致しました。いろいろな場所でのライブ配信をご覧の皆さんと一緒に、いわばバーチャルに⁽ⁱⁱ⁾拡張された安田講堂において、祝いたいと思います。

さて、新型コロナウイルス感染症は、またたく間に世界全体に広がり、経済や社会に大きな影響を与えています。その克服はいまだ途上にあり、収束に向けた様々な努力が日々続いています。国内外で、この感染によって多くの方々がお亡くなりになりました。お亡くなりになった方々のごメ^いイフクをお祈りすると共に、ご家族の皆様にご^いお悔やみを申し上げます。また療養中の皆様には、一刻も早い快復をお祈り致します。

(令和元年度 東京大学学位記授与式 五神真総長告辞)

この部分を読んで、どのようなことに気づくでしょう。挨拶ならではの特徴かもしれませんが、この機会を祝う「おめでとうスタンス」のようなものが濃厚に出ているのがわかるでしょう。

「おめでとうスタンス」の最大の特徴は、それがはつきりことばに出して言われることです。相手に対する思いやりや善意、祝

福の気持ちはいちいちはっきりことばにしなくてもいい、という場合もあるでしょう。あまりそれをことばにしすぎるとかえって嘘うそっぽくなってしまふ。むしろ心に抱いているだけの方がいい。とりわけ個人的な愛情などは、あまりしつこくことばにするよりは、「お気持ちだけ」の方がより温かみが伝わるということもありそうです。

しかし、こと挨拶に関しては違います。挨拶はことばにしなければ意味がないのです。明確にことばとして口にされていなければ、挨拶は挨拶として機能する。

では、ここでの挨拶の機能とはどんなものでしょう。それは「私はあなたに挨拶しているのだよ。あなたのことを祝っているのだよ」ということの確認です。しかもこの確認はしつこいほど何度も行われています。この五段落分の引用の中だけでも実にたくさん「おめでとうフレーズ」が鑲ちぎめられています。

・「心よりお祝いを申し上げます」

・「お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います」

・「期待しています」

・「ここに集って、祝うことを私たちも楽しみにしております。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形で式を執り行うことに致しました」

・「いわばバーチャルに拡張された安田講堂において、祝いたいと思います」

「お祝いを申し上げます」と冒頭に言ったのだから、もう十分のようにも思えます。こんなに何度もリマインドしなくても総長が学位の授与を祝っていることははっきりしている。これを聞いて「あ、そうか、忘れるところだった。これはお祝いだったのだ。リマインドしてくれてありがとう」と反応する人はまずいでしょう。この学位授与式という場がすでにお祝いの場だということとはわかりきっている。式辞が「お祝い」以外のことを意味するとは考えにくい。そういう意味では、総長はたったの一言

も「おめでとうございます」などと言わなくても、十分「お祝いモード」を伝えられるはずなのです。それなのに、なぜ、しつこく「私はあなたを祝っているのだよ」と繰り返し確認するのでしょうか。

第二節

実は、この繰り返しにこそ意味があるのです。なぜなら「挨拶」にしても「お祝い」にしても、意味を伝えることが第一の目的ではないからです。いや、意味はもちろん大事なのですが、意味を伝えることによって意味を伝えるのではない、と言ったらいいのでしょうか。

それはこういうことです。ことばを使うときに重要なのは、自分のメッセージを相手に伝えることだと考える人は多いでしょう。実際、ことばを使いながら一番意識するのは、「伝える」というところかもしれない。しかし、それはあくまで意識レベル。私たちはことばを使う際、意識している以上のことも行っています。意識レベルで「自分は〜ということ伝えてる」と思っている、ことばの運用の中では抽象化されたメッセージ以上の何かをも伝えてるのです。

それをするのがことばの「身体」の部分です。ことばの「頭」の方は、頭の中で用意したメッセージを送り出すことに精一杯で、受け取る側も、「あ、向こうがこんなメッセージを送り込んできた」という風に対応する。こうして「頭」と「頭」がメッセージの投げ合いをする。ここでは「意味を伝える」「意味を受け取る」という行為を通して意味が生み出されているわけです。このようなメッセージのやり取りだけをとらえて「ことばの出来事」として意識する人は多いでしょう。

しかし、ことばはメッセージのやり取りだけで完結するわけではありません。ことばには「形」があり「身体」がある。総長告辞の「お祝いモード」の繰り返しは、まさにこの「身体」にあたるわけです。「心よりお祝いを申し上げます」「お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います」「期待しています」……とお祝いことばを次々に繰り返し出されても、ことばの「頭」の部分は無反応でしょう。「あ、新しいメッセージが送られてきた」とは思わない。でも「身体」の部分はしっかり反応するのです。

b

、繰り返しということばの物理的な横溢を通して、メッセージ内容としてはなかなか伝えることのできない、

ことばの物質性と出会うからです。

人間は「頭」だけで自分の現実を生きているわけではありません。頭でわかっているとしても実感が無いということがあるけれど、逆に頭ではわからないのに、実感だけはあるということもある。よくわからないけれど無性にうれいとか、なぜかわからないけれど哀しくなってくる、といった言語体験はありうるのです。それを私たちが明確に体験するのは歌や踊りといった身体性を伴った言語体験ですが、そうしたものを伴わなくとも、ことばそのものの運動を通して、めでたさや、華やぎ、浮遊感、さらにはゲンシユクさ、スウコウさ、そしてかすかな哀しさや悲壮感などが身体的なこととして感じ取れることがある。これらは「頭」ではなく「身体」でこそ感知されるべき「ことばの出来事」なのです。

式というのはまさにそういうものなのです。「頭」でわかっている時間の中の区切りを、より身体的に体感するために行われるもの。だから、そこにメッセージとしての意味を求めるのは違うのです。ギレイや祝祭は身体的に受け取られる必要がある。ほんとうは歌ったり、ジャンプしたり、踊ったりすることでその意味を受け取る方がいいのかもしれないが、そのかわりに私たちはことばのジャンプや踊りを体験する。式典にしばしば飲み食いに伴うのは、身体の反応を呼び覚ますためでもあるでしょう。

第三節

c、式辞というものは実におめでたいものです。とくに冒頭には、いいことばかりが書いてある。もちろん「コ罗纳禍」とか、その他の難局についても触れられてはいますが、全体として、「いいこと」「楽しみなこと」そして当然ながら「めでたいこと」が鏝められている。世界に対して肯定的なのです。「そりゃ、めでたい式辞なんだから当然でしょう」と思われるかもしれません、これは式辞だからというより、出会いの挨拶全般に共通する特徴です。

示唆的なのは、五段落目の冒頭の「さて」ということばです。冒頭部分のいかにも「挨拶らしい多幸感にここでぐっとブレーキがかけられ、新しい展開につながっていくのがわかります。逆にいうと、今までの幸せ一杯な感じはあくまで「挨拶」にすぎなく

て、このあと、イバラの道とも言えるような内容が続くのかとも思ったりする。

どうして「挨拶」はめでたさに満ちているのでしょう。そのことを理解するには、そもそも「挨拶」とは何かということを考える必要があります。同じ挨拶でも日本語のそれは定型性が強いと言われています。「こんにちは」などの決まり文句をマスターすれば何とかなる。英語でもHi, Helloのような決まり文句がありますが、たとえばHow are you?の場合、もう一言返さなければならぬ。教科書通りにI'm fine. だっていいわけですが、別の言い方もありうる。その後の会話のための「きっかけ」となりうる。もちろん、日本語の「こんにちは」もほんとうはそうで、無理にそこで終わる必要はありません。

いずれにしても挨拶は、⁽¹⁾その後にくくことばとは少々役割が違います。あくまで「きっかけ」。ではその「きっかけ」を通して、人は何をしようとしているのか。先ほどの総長の告辞では繰り返しに確認の役割があることにも触れました。「私はあなたのことを祝っているのだよ」と総長はしつこいほど言う。それが結果的に、ことばの物質的な横溢と運動性を生み出すことになり、華やいだめでたさを創つておきました。これが確認の身振りでもあるということはおきまじょう。

なぜ総長はこんなに執拗に確認する必要があるのでしょうか。それはおそらく総長が確認しているのが、「祝っているよ」という事実だけではなく——何しろ、これは確認する必要があるほど明白なことですから——それに加えて「私はあなたを祝っているよ」という「私」と「あなた」の関係性でもあるからではないでしょうか。この関係性の確認を通し、総長はひよつとすると「これからも仲良くしようぜ」「これまでも仲良かったよな」「俺たちは昔からずっと、そして未来永劫仲良しき」といったことも確認しているのかもしれませんが。そしてここまでくると、これは関係性の確認であるとともに、関係性の樹立／構築でもあるということに気づきます。

つまり、総長は挨拶という場ではしば行われる関係性の確認という身振りを通し、実際には関係づくりそのものを行っているわけです。これが「挨拶」の奥深い部分でもあります。確認のようなスタンスをとったこうした関係樹立こそが、挨拶のもっとも大きな機能だとも言えるでしょう。

第四節

文章の「挨拶」の部分に注目するとあらためて確認されるのは、文章を読むということが、まずは書き手と読み手との間の関係性の確認からはじまる、そして文章を読むにあたってはこの部分がけっこう大事である、ということだ。その関係性が希薄な例として広告がありますが、広告以外の多くの文章では関係性樹立がしっかりと行われています。ある意味では広告も「関係を樹立しない」という関係性を宣言していると言えるでしょう。

こうした関係性には総長告辞のように「おめでとう、これからも仲良くしよう」というものから、「仲良くしましょう。でもほどほどに」といったものまでさまざまですが、その中でも興味深いのは偽の関係性が表現されている場合です。言うまでもなくそれは小説です。

小説の冒頭部分もその作品と読者が「挨拶」をかわす場です。しかし、たとえば劇場やスポーツイベントとは違い、「このたびは本書を手にとってくださりありがとうございます」といった日常的な挨拶のことは提示されることはありません。そのかわりに、もつと迂遠な形で読者と作品（もしくは作者、あるいは語り手）との関係が構築されるわけですが、迂遠なだけにそこにはさまざまな可能性がある。そのおかげで、小説に出迎えられ読み進めていく心地は、通り一遍のことばでは説明できない奥深いものとなります。

以下は谷崎潤一郎の『世』の冒頭部分ですが、そこにはどんな「挨拶」が読み取れるでしょう。

先生、わたし今日はすっかり聞いてもらおうつもりで伺いましたのんですけど、折角お仕事のとこかまいませんでやろか？ それはそれは詳しいに申し上げますと実に長いので、ほんまにわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何まで書き留めて、小説のような風にまとめて、先生に見てもらおうか思ったりしましたのんです。……実はこないだ中ひよつと書き出して見ましたのんです、何しろ事件があんまりこんがらがって、どういふ風に何処から筆着けてええやら、とてもわたしなんぞには見当つけしません。そこでやっぱり先生にでも聞いてもらおうより仕様ない思い

ましてお邪魔に出ましたのんですけど、でも先生わたしのために大事な時間滅茶々にしられておしまいになって、えらい御迷惑でございませうな。ほんまに宜しよろございませうか？

これは非常によくあることなのですが、冒頭部は作品と読者が出会う場であるだけではなく、作品内で登場人物同士が出会うたり挨拶をかわしたりする場ともなりえます。引用した『正』では、今、語っている女性が「先生」と呼ばれる人に話を聞いてもらうために訪れた、という設定になっているのがわかりますが、二人は旧知であるように読める一方、そこには一定のフォーマルな「かしこまり」や「遠慮」、そして「お願い」の身振りなどが読み取れます。

たとえば「先生、わたし今日はすっかり聞いてもらおうつもりで伺いましたのんですけど」の「先生」は、たった一言でいろいろな含みをもったことばで、「先生」と呼びかけるからには女性は相手を敬う立場にあることはわかるわけですが、ほんとうに敬っているかどうかはともかく、少なくとも「あなたは先生なんだから、あたしの相手をしてほしい。あたしの面倒を見てくれ」といった「ウツタえかけ」や「甘え」、さらには「要求」さえが読み取れます。

d、「折角お仕事のとこかまいませんですよ？」はもちろん純粋な疑問ではなく、いわゆる社交辞令なのは明らかです。「あたしはあなたの仕事を邪魔してでも、どんどん話すからよろしくね」といった含意が読み取れるでしょう。ただし、そこで注意しておきたいのは、しゃべる女性がかなりしつこくこうした「へりくだり」のことばを繰り返していることです。この後にはさまれることばにも、「お邪魔に出ましたのんですけど」「先生わたしのために大事な時間滅茶々にしられておしまい」「えらい御迷惑でございませうな」「ほんまに宜しよろございませうか？」といった「挨拶」のフレーズが繰り返されます。この人はなぜこんなにしつこくことばを繰り返すのでしょうか。

ここには、総長が告辞の中で「お祝いフレーズ」を何度も繰り返したのと同じような効果が読み取れるでしょう。総長の「お祝いフレーズ」は「これからも未来永劫、仲良くしような」という関係性の樹立を試みていました。同じように『正』の話し手は「あなたには私にとつては先生なのだから、あたしのお話を聞いて相手をしてくれる義務がある」というメッセージを伝えるだけでなく、

そうした関係性を固めようとしているのです。関係性というものは、それを指し示して認知することによってだけでなく、踏み固めるようにして何度も何度も口にすることで構築されるものなのです。つまり、人と人との関係は、ことばの内容によってだけではなく、ことばの身体(形)を通してこそつくられるということなのです。

しかし、総長の告辞と比べると『E』の話し手にはややこしい部分があります。この語り手には表向き言っていない、しかし、含意としてこめられている思惑がさらにあります。この人は「……あたしの話を聞いて相手をしてくれる義務がある」と言わんばかりに「ほんまに宜しございますか?」といったフレーズをタタみかけてくるわけですが、まさに今、私が「言わんばかり」と言ったように自分ではそれは言っていないのです。明言はしない。最後の「うん」というところは、相手に言わせたいのです。

こうしたところには人間関係の濃厚な絡み合いが見て取れるわけです。自分がしたいことを勝手にしたり、無理矢理相手を支配したりするのはもちろんエゴの表出なわけですが、このように自分がして欲しいことを相手に自発的にやらせようと仕向けるのは、いわゆるマニピュラティブ(策略的)な形をとったより粘着的な権力への執着です。それがそのままことばの形にも出る。実際、『E』という作品には、そうした執着がたっぷり描かれることになりましたし、同じ谷崎の『細雪』のような作品にもそうした迂回性があります。

第五節

さて、これが作品内の「挨拶」から読み取れる関係性でした。では、作品外はどうでしょう。つまり、私たち読者と作品とはどう「挨拶」をかわし、どんな関係性をつくりあげていくのでしょうか。

まず注意しなければならないのは、話し手が旧知と思われる「先生」に、絶え間なくことを練り出しながら話しかけている、しかも関西弁で、という場面を前にして、私たちは完全に出遅れるということなのです。出遅れたせいで何が起きているのか把握しきれず、従って、必死に状況を理解しようとする。読み進めていくうちに少しずつ理解は進むでしょうが、それでもしばらくは「蚊帳の外」のままです。

そこから言えるのは、作品が読者に対してやや不親切だということ。パーティ会場に到着したのに、誰も「あら、いらっしゃい」とか「おお、さん、来たか」と言ってくれず、いつまでも話し相手もないままひとりで立食用のサンドイッチに手を伸ばしつづけるような心境と言えるでしょうか。

しかし、こんなふう放っておかれることで、話し手と先生との間のやり取りを外からながめるための準備は整うかもしれませんが。この話し手が語ろうとしている内容にはどうやら尋常^(オ)ではないところがあるようですが、この尋常ではないものを受け入れるためには、むしろこのようにちよつと距離があるところから少しずつ追いつくくらいがちょうどいい。読者からすると、この作品にはそう簡単にはのめり込めない。だから、「先生」という存在が間にクッションとして入って、私たちのかわりにこの話し手と関係を樹立し、私たちがそれを外から受け入れるという「形」になっていると、なるほど、という気にもなりやすいのです。

このように⁽²⁾本筋となるものを読者が間接的に受け取るような物語には、「枠構造」があると言われます。たとえば手紙をあけてみたら、そこに驚くべき物語が展開していたとか、主人公が又聞きで物語を知ったとか、あるいは本棚の裏の壁の取っ手を引っ張ったら、知らない世界に転落した、といったように、私たちが住む現実世界がフィクションの世界とうまくつながるようさまざまな工夫がなされてきました。一九世紀くらいまでは、そうした枠構造を前にした読者の地位は安定していて、あくまで読者（もしくは朗読の聞き手）として内容を差し出されるが多かったのですが、二〇世紀に入ると作品内には読者の居場所が用意されていないということが起こってくる。そのまま読者そっこのけで話が進んでいくので、どんなふうにも作品とかかわつたらいいのかわからなくて不安になったりします。極端なのは不条理系と言われる作品で、カフカの一連の小説などはよく典型例としてあげられます。

e、そこに関係性がまったく欠如しているわけではありません。関係性はあくまでマイナスで一方的。言い換えれば、マイナスという形での関係性がつくられていくのです。作品が読者に対してよそよそしかったり、『E』のように読者が出遅れるように仕向けられていたりすると、読者としてはぶつきらばうな仮面の向こうをのぞいたり、一生^(カ)ケンメイ走って作品に

追いつこうとしたりするわけです。これは実際の人間関係でも同じことが言えるでしょう。もちろん、人間関係と同じではありません。ソエンな場合はただの赤の他人として終わる。作品を手に取りもしないということになるわけですが、それが絶妙な塩梅で演出されていると、いったん頁をめぐりはじめたが最後、私たちはいやおうなく踏み固めるようにしてそこに関係をつくってしまふのです。

(阿部公彦「日本語『深読み』のススメ」をもとに作成)

(注) 1 谷崎潤一郎——小説家(二八八六—一九六五)。

2 カフカ——小説家(二八八三—一九二四)。

【出典】 阿部 公彦 著 「日本語『深読み』のススメ 第六回 文章はいかに挨拶をするか」

『トトバ』二〇二二年秋号

問題Ⅰ 次の問いに答えなさい。(配点20点)

問一 傍線部(ア)～(オ)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

(ア) 折衷

(イ) 執り

(ウ) 無性に

(エ) 蚊帳

(オ) 尋常

問二 傍線部(あ)～(こ)のカタカナを漢字で書きなさい。

(あ) ヒンパン

(い) ごメイフク

(う) ゲンシユクキ

(え) スウコウき

(お) ギレイ

(か) イバラ

(き) ウツタエ

(く) タタみ

(け) 一生ケンメイ

(こ) ソエン

問三 傍線部(i)～(v)の対義語を、それぞれの括弧内の漢字を使って書きなさい。ただし、同じ漢字を複数回使ってはいいません。

- | | | |
|-------|----|-----------------|
| (i) | 授与 | (地 御 領 令 預 受) |
| (ii) | 拡張 | (引 縮 量 衰 小 最) |
| (iii) | 当然 | (決 解 外 内 検 意) |
| (iv) | 濃厚 | (辛 淡 低 細 白 名) |
| (v) | 支配 | (属 事 性 抛 占 従) |

問題Ⅱ

点

次の問いに答えなさい。なお、論述形式の問いでは、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。(配点55)

問一 空欄

a

e

に入る語句としてふさわしいものは何か。その組み合わせとして最も適当な

ものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- | | | | | | |
|-----|----------|--------|----------|--------|----------|
| (1) | a—まずは | b—従って | c—それにしても | d—しかし | e—なぜなら |
| (2) | a—それにしても | b—なぜなら | c—まずは | d—しかし | e—従って |
| (3) | a—まずは | b—従って | c—しかし | d—なぜなら | e—それにしても |
| (4) | a—従って | b—しかし | c—なぜなら | d—まずは | e—それにしても |
| (5) | a—まずは | b—なぜなら | c—それにしても | d—従って | e—しかし |

問一 波線部(A)「東京大学総長の告辞」の冒頭部の説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) ことばにしらない方が、より温かみが伝わることもある。そこで告辞ではフレーズの繰り返しは多いが、祝福の気持ちをはつきりと表現することなく、「お祝いモード」の温かみを伝えている。
- (2) 告辞において、「おめでとうフレーズ」を何度も繰り返し「お祝いモード」を伝えている。そして後段ではお祝いの雰囲気をとめて、その後の新しい展開を予感させている。
- (3) 告辞の中で「おめでとうございます」ということばを一度も使っていない。それにもかかわらず、類似するたくさんのおめでとうフレーズを鏤めることで、十分に「お祝いモード」を伝えている。
- (4) 告辞全体を通して徹頭徹尾「お祝いモード」を表現している。そのため「おめでとうフレーズ」を全ての段落に鏤めて、「おめでとうスタンス」を濃厚に表現している。
- (5) 前段では、学位を授与される人数や開催場所などを正確に述べ、中段では式の形式にかかわる事項の説明をしている。このように、式の概要をしつこいほど繰り返し確認することで「お祝いモード」を表している。

問三 波線部(B)「この繰り返しにこそ意味がある」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) 何度もことばを繰り返し表現することだけが重要なのであって、それ以外のことは、意味を伝えるためには全く役に立たないということ。
- (2) 執拗にことばを繰り返すことで、意識的なメッセージとして高度に抽象化された意味を身体的に感じさせることができるということ。
- (3) 何度も繰り返し返すことで、お祝いのあることをリマインドし、「リマインドしてくれてありがとう」という感謝の気持ちを受け取ることができるということ。
- (4) 「私はあなたを祝っているのだよ」と繰り返し確認することによって、祝っている人物が誰かということが、「身体」の底から理解されるということ。
- (5) ことばの意味によってメッセージを伝えるというよりも、繰り返すということばの運動自体によって、「頭」では伝えにくいことを身体的に感じさせているということ。

問四

波線部(C)「ことばの『頭』の部分は無反応でしょう」とある。なぜ無反応なのか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) お祝いことばの繰り返しは、抽象化されたメッセージとしては意味がないから。
- (2) ことばの「頭」と「頭」のメッセージの投げ合いは、失敗することがあるから。
- (3) お祝いことばは、意識レベルでのメッセージを有していないから。
- (4) ことばを使うときに一番意識するのは、ことばの「身体」の部分のみを伝えることだから。
- (5) ことばによってメッセージを受け取ることで、「ことばの出来事」は完結するから。

問五 波線部(D)『E』の冒頭部分』の説明として最も適当でないものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) 冒頭部分としての話し手の語りの中で、「へりくだり」のことばが繰り返し用いられ、「挨拶」のフレーズも何度か繰り返されている。
- (2) 登場人物同士の出会いを演出する冒頭部分であり、話し手が「先生」に対して少なくとも表向きには控えめな態度があると考えられる。
- (3) 人間関係の濃厚な絡み合い、すなわち話し手と「先生」以外にも別の人物がかかわっていることを読み取ることができる。
- (4) 話し手のことばには直接表現されていないが裏に隠れた思惑があり、総長の告辞とは違ったややこしさが存在している。
- (5) 短い冒頭でありながら、そこに表現された話し手のことばから、話し手の戦略的な形をとった権力への拘泥が認められる。

問六

波線部(E)つまり、人と人との関係は、ことばの内容によってだけではなく、ことばの身体(形)を通してこそつくられるということです。」とある。この「ことばの身体」に近いものはどれか。最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) ことばの論理性
- (2) ことばの物質性
- (3) ことばの日常性
- (4) ことばの抽象性
- (5) ことばの観念性

問七 波線部(F)「完全に出遅れるということですよ」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次

の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1) 小説の冒頭部分で読者と作品の関係性について説明されていないため、作品外の読者はその関係性を誤解してしまいがちだということ。

(2) 読者は、物語の冒頭部分でなされる作品内の関係性についての丁寧な説明を理解するのに時間がかかってしまうということ。

(3) 作品外という立場にいる読者が、作品内の関係性をほとんど理解できないまま物語が展開してしまっているということ。

(4) 絶え間なく関西弁でことばが繰り返されるために物語がなかなか進まず、読者としては退屈に感じられてしまうということ。

(5) 物語の展開があまりに速いため、読者はその展開についていくことができず、十分にその内容を理解できていないということ。

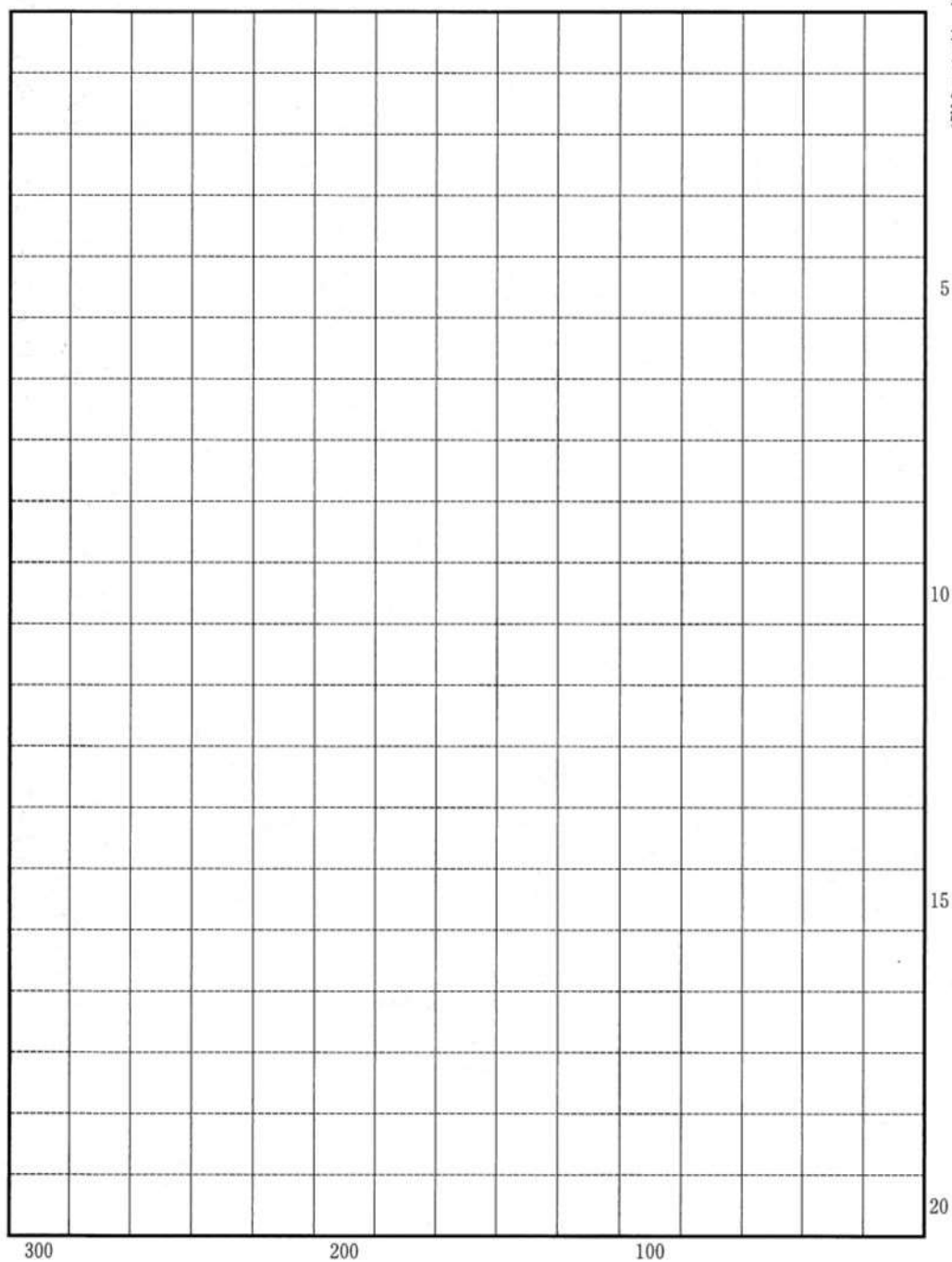
問八 二重傍線部(1)「挨拶は、その後にくくこととは少々役割が違う」とある。ここでいう「役割」とは何か。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

問九 二重傍線部(2)「本筋となるものを読者が間接的に受け取るような物語には、『枠構造』がある」とある。それはどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

問題Ⅲ

「挨拶」について、本文全体の内容を踏まえ、その要点を三〇〇字以内で記述しなさい。その際、「身体」「作品」という語句を必ず用いること。なお、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。(配点25点)

(下書き用紙)



(下書き用紙)

